## あとがき

### 榎本和子、この６年間の戦い

このたびの展覧会は「榎本和子展：1987-1989」展であります。その内容はアクリルのペインティング、ドローイング等20点で、初期作品（1951、52年）の油彩2点を含め計22点が展示されます。

カタログの内容は、テキストとして大岡信「榎本和子の春のために」、作者による自筆年譜、展示作品から12点が収録されています。お忙しいなか、この展覧会のために御寄稿いただいた大岡信さんに厚く御礼申し上げます。

榎本和子の画業については上記の大岡さんのテキストおよび作者自身が作成した詳細な自筆年譜をお読みいただくのが一番であります。私は榎本和子の人間像を親友の福島秀子との交友を通して記したいと思います。

私が榎本和子さんという人物を意識したのは、福島秀子さんが1991年10月、蜘蛛膜下出血で突如倒れた時点に始まる。入院、手術、看護等資金的な問題を含め弟の福島和夫さんと協議奔走するかたわら、92年7月に開催予定の第12回オマージュ瀧口修造：福島秀子展の諸準備、詳細な年譜の作成等に精力的な活動を続けたのであるが、そこで榎本和子の本質を私は知ることとなった。

この9カ月間は彼女にとって苦悩と不安が交錯する日々であった。しかし彼女は冷静に諸事情を整理し、的確に行動したのである。決して周囲に愚痴、弱音を吐かなかった。しかし私は彼女の額や目に滲じむ疲労の色を読みとり、彼女の健闘を祈らざるを得なかった。

しかし、それは杞憂に終った。7月3日（'92）の福島秀子展のオープニング・パーティに福島さんは画廊に出席された。われわれは拍手で彼女を迎え祝福した。長谷川夫妻（ギャラリー長谷川）のご厚意で、会場は当画廊と合せ3会場で福島秀子の全貌展が開催されたのである。

それから5年経った昨年秋、不調を訴えていた福島秀子さんは肺ガンと診断された。現在望み得る最高のホスピスに入院できたのは榎本和子の手腕と不思議な力がさせる業としか言いようがない。8カ月ばかり過したこの病院での生活環境は申し分なかった。福島秀子さんは6月末容態が急変し、この7月2日、苦しみの色は微塵もなく、静かに、おだやかに、まるで眠っているかのように、還らぬ旅へと旅立ったのである。

福島秀子の終焉のドラマには魔術的なしくみが隠されている。福島、榎本両人の師、瀧口修造が現われてくる。瀧口修造の命日は'79年7月1日である。福島秀子は'97年7月2日午前4時に亡くなっている。まずその年が逆数である。同時に、瀧口の亡くなった日の翌日早朝に福島が師のもとに旅立つというのはニクイというほか言葉はみつからない。それに福島さんの誕生日は'27年2月7日で、亡くなったのはその逆数の7月2日なのである。これらの数字は合せようと画策しても不可能である。偶然としか言えない。しかし、ここまでくると単なる偶然とはとても思えない。必然と言うべきである。私はそこに天の摂理、神の意志を感ずるものである。この信じがたいドラマの演出者が榎本和子なのだ。

榎本和子を語ることは福島秀子を語ることになる。というのも、この2人の画家は1951年以来の交友で年齢も近いし、人生経験、環境等も似ている。しかしながら、大事なところは、お互いに異る個性と資質を持ち、お互いにその価値を認め合い、それを交換し得たというところにある。単なる好き嫌いを超越し、尊敬し合って生きた40年余の歳月の重みは大きい。秀子の生は和子の生であり、秀子の苦悩は和子の苦悩なのだ。榎本和子は苦悩や不安が重ければ重いだけ、自分は試されているとして、それを正面から受け止め、立ち向って行った。そうでなければ私には榎本和子の行為は理解できないし、説明がつかないのである。

榎本和子の戦いは終った。終ったところでこの展覧会が始まる。1987～89年のしごとは自由奔放、カラフルで躍動感に溢れ気持のよい絵画である。このしごとはほぼ20年前のA・デューラー「メランコリア Ⅰ」の多面体の謎を解いた彼女の数理的才能の表現とは対極のしごとである。榎本和子が透徹した理性と豊かな感性を合せ持つ芸術家であることがここに示されている。「謎の多面体」については自筆年譜にその概要が記されているのでご覧いただきたい。来年7月の第18回オマージュ瀧口修造展はこのテーマで開催を予定していることを述べ、あとがきの言葉といたします。

1997年8月7日

佐谷和彦